

けれども、沖縄で受け止めている気持ちは、札東で沖縄県民を言うこと聞かそうとしたというように、沖縄県民が歴史の痛みに耐えて、あの琉球王国から島津藩になり、島津藩から琉球処分を受け、また沖縄になり、そして戦場になって、本土でたった一つの戦争の傷痕を残して、またそこで大きな戦争の後は、今日まで六十八年間、基地を全員の七三％負担をするという状態になってきたわけでございますから、そういう気持ちを十二分に理解し、その米軍がまた駐留するために起きた幾つかの犯罪がまた沖縄県民に多くの犠牲と誇りを傷つけてきているということを考えながら沖縄に施策を持っていかなくては、私は県民の支持を得ることができないと、このように思うわけでございます。

特に、最後の日に幹事長が行かれて五百億の名護の振興基金を約束されたというのは、非常に現地において、私自身、名護の土地において、名護の皆さんの大きな憤激を買ったことを今肌で感じておる次第であります。

○有村治子君 時間ですので短くいたします。貴重なお話を本当にありがとうございます。勉強になります。

最後、ちよつと関連するんですけど、官房機密費はどのように使われるべきでしょうか。そして、その機密費を使われる方は良心と倫理観と歴史の評価に堪え得る判断をしていただきたいとは思いますが、その官房機密費の使われようというのはどのように国民に説明責任、結果報告がなされるのが健全であり、国民の安全あるいは平和維持に資するとお考えになりますでしょうか。

○参考人(野中廣務君) 官房機密費は機密費でありますから、この席で申し上げるべきことではございません。

○有村治子君 ありがとうございます。

○会長(武見敬三君) それでは次に、堀井巖君。

○堀井巖君 自由民主党、堀井巖でございます。

(会長退席、理事岡田直樹君着席)

今日は、本当に貴重な機会をありがとうございます。

ます。

私自身も旧自治省で勤務をいたしておりました。また、生まれ年が一九六五年、昭和四十年ということ、野中先生の四十年後に生まれた者でございます。是非とも、今日いろいろ御示唆いただきまして、是非とも、また質問にお答えいただき、この若い駆け出しの議員に對しまして貴重な御示唆を賜りたいと、このように存じております。

まず、先ほどお話ございましたが、とにかく日本という国を戦争に、再び惨禍に陥らせない、平和を希求していく、このことが私自身も国会人の一人として最大の責務であるということをおいても、特に国際環境が様々に変化する中で、いかに我々が知恵を絞る、そして戦略を考え、諸外国としっかりと関係を持ちながら平和を希求していくのか、そのためにも、この国会でより一層、与野党を超えて戦略的あるいは建設的な議論を行っていくことが重要だということを変更して痛感した次第でございます。

そこで、私からは一つだけお伺いをいたしたいと思っております。これまでこの議会制民主主義を代表する議員として、あるいは議院内閣制のまことに要としてこれまで御尽力をされてこられました野中先生から見まして、今後、我々国会人に対して、そして、そしてまた参議院として良識の府ということ、そして我々自身で体現をしていかなければならないという議員に對しまして、先生はこれまでどういふ点が重要だと心の中で考えながら内閣の要として御活躍をされてこられたのか、我々に、次の世代にアドバイスをいただけることがありましたら、是非ともお願いをしたいと存じます。

○参考人(野中廣務君) 私の時代は、昭和二十年の八月十五日に私は高知の野市というところにおりました。戦争の終結を迎えました。あと一週間もあつた戦争が続いておつたら、私は今日この場所です。

こうして先生方にお目にかかることはなかったと、こう思いますと、あの戦争の恐ろしさを、またそれで生き長らえさせていた私の使命を強く思うものでございまして、生きた人間が多く犠牲になった人たちのことを思うと、私より二つも三つも若い特攻隊の諸君がもう行きがけの油だけを持って突入していった姿をこの目で見ておりますから、私はそういうのを見ておりますと、あの戦争のむごい状態をもう一度若い皆さん方が思い起こしていただいて、そして勉強し研さんしていただいて、この国が再び戦争の戦火にまみえることのない、そして戦争に負けた国だということ、その状態を常に胸に持ちながら隣国や関係国との平和友好の道を歩んでいただきたい、このことを思うわけでございます。また、政治家として、地方で困難な仕事に取り組んでおる地方の議会の皆さん、あるいは理事者の皆さん、職員の方々の痛みや苦しみをよく国政でしんしゃくしていただいて、地方の悩みや苦しみを是非軽減してやっていたことをこの際にお願ひしておきたいと存じます。

(理事岡田直樹君退席、会長着席)

○堀井巖君 貴重な御提言、誠にありがとうございます。

○会長(武見敬三君) それでは、風間君。

○風間直樹君 野中先生、本当に長時間ありがとうございます。今日、私が最後の質問をさせていただきますことになりました。

今日のお話を伺いして、非常に心にしみるお話を多々頂戴いたしました。その中で、一点、外交問題について歴史の事実として野中先生から経緯をつまびらかに伺えればと思うのが尖閣の問題であります。

私は、選挙区が新潟でございます。田中角栄先生の生まれた土地の隣に私は生まれたわけでございまして、ちょうど民主党政権の最後、野田三三内閣で尖閣の日本政府による取得という問題が出たときに、あの直後に私、外務省で政務官を務めさせていただきました。この尖閣のいわゆる棚上げ問題というのは、外務省でいろいろ内部で聞いてみましても、実際のところ、歴史の事実がどうだったのかということが、私の在任期間が短かつたこともありまして、明瞭には私自身は見えてま

りませんでした。

先ほど先生は、田中総理のときにこの尖閣に関する棚上げの話が、恐らく先方ででしょうか、出たという趣旨のお話をされましたけれども、その辺の詳細をもつまびらかに伺うことができれば有り難いと思っております。

○参考人(野中廣務君) 私が去年の六月に中国に超党派で訪中をいたしました。先ほど申し上げましたように、ナンバーファイブの劉雲山常務委員・書記、政治局長にお会いいたしました。そのときに話をしたことを中国の新聞が大きく取り上げましたので、帰ってまいりましたら、もう日本のマスコミに囲まれて、いきなりその暴言を取り消すかというような質問をきたした記者もおりました。けれども、私は、自分がこの耳で聞いた田中角栄先生の話をそのまま率直に申し上げただけであつて、それ以上の事実を私は確認したわけでもありません。

ただ、今日は持ってきていないんですが、私は、田中角栄先生にお会いしたのは昭和二十九年、まだ自分の町の町会議員をしておるときでございました。そして、田中先生の友人に紹介されて田中先生にお会いをして、自來、三十二歳で郵政大臣をおやりになりましたときに、自分の町の郵便局の建て替えをお願いをしたり、そういう中から度々お宅を訪問する機会を得て、結果的に、京都で二議席の、前尾、谷垣両先生がお亡くなりになりました。補欠選挙が行われたときに、くしくも谷垣先生の御令息、今法務大臣の谷垣禎一さんと私が、ちょうど京都の副知事を一期で辞めさせていただいた直後でありましたので、亡き前尾先生が後継者を定めずと決めておられた中で、前尾先生の関係者から、是非、前尾先生が京都の府政を転換してくれた野中君に期待をするという話をしておられたからあなたが出るという話になりま